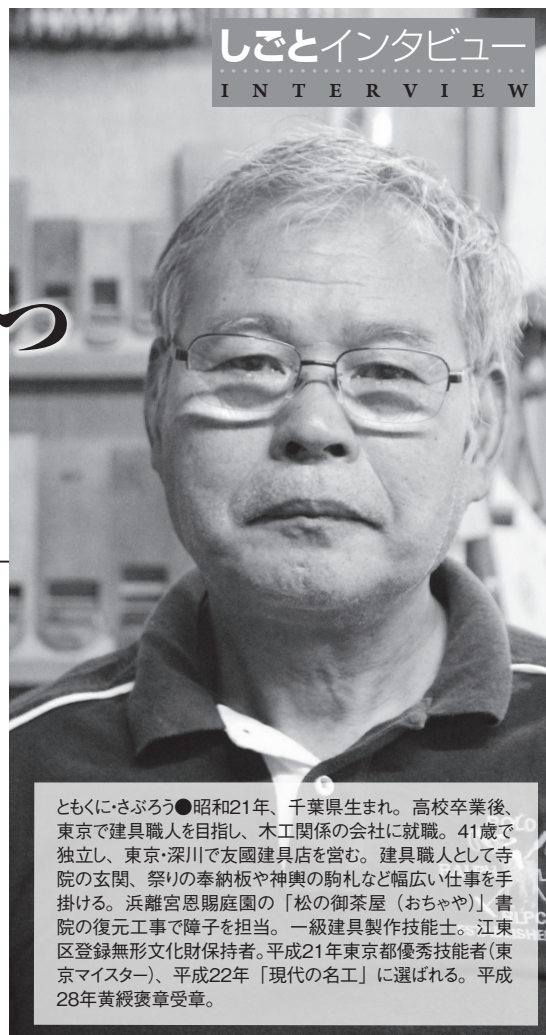


未経験の仕事に 挑戦することで、 職人としての技も心も育つ

友國三郎さんは建具職人として数多くの仕事を手がけ、高い評価を受けています。お話からはその名声に満足することなく、さらに高みを目指す心意気がうかがえます。

建具職人 友國三郎さん



ともくに・さぶろう ●昭和21年、千葉県生まれ。高校卒業後、東京で建具職人を目指し、木工関係の会社に就職。41歳で独立し、東京・深川で友國建具店を営む。建具職人として寺院の玄関、祭りの奉納板や神輿の駒札など幅広い仕事を手掛ける。浜離宮恩賜庭園の「松の御茶屋（おちゃや）」書院の復元工事で障子を担当。一級建具製作技能士。江東区登録無形文化財保持者。平成21年東京都優秀技能者（東京マイスター）、平成22年「現代の名工」に選ばれる。平成28年黄綬褒章受章。

高校卒業後 建具職人の道に進む

——建具職人になろうとしたきっかけを教えてください。

友國 私は千葉県の山武郡（現山武市）の生まれです。ここは高級木材として知られた山武杉の産地で、周りには木工職人も多くいました。また普段は農業に従事している人も、農閑期には建具作りをしていました。そうした環境で育ったことが建具職人を目指すきっかけとなったのではないかと思います。

おじが東京で建具屋の会社を営んでいて、そこでは3歳上の兄が建具職人

として働いていました。おじからの誘いもあって高校卒業後に私もその会社に入り、建具職人としての修業を始めた。

——仕事はどのようにして覚えたのですか。

友國 主に兄の仕事の手助けをしながら、仕事を覚えていきました。また兄の仕事仲間を仕事場に訪ねたことも勉強になりましたね。私はその仕事場で実際に作業するわけではありませんが、どんなふうに仕事をしているのかがわかりました。そして「これは覚えたい」と思った仕事は帰ってからその真似をしました。建具職人が一人前になるにはだいたい10年と言われていますが、私はそうしたことを繰り返したおかげで、比較的早く仕事を覚えたのではないかと思います。

——独立されたのはおいくつのときですか。

友國 41歳のときです。修業を始めてから二十数年経ってからですね。この深川一帯は木場と呼ばれるエリアで、かつては近くの川には筏が行き交っていました。木工職人も多く、職人同士の付き合いもありました。そうした仲間と腕を競うということはあまりありませんでしたが、技能大会などにはできるだけ参加しましたね。

建具職人は大きく分けると「工場で作る仕事」と「現場で取り付ける仕事」

があります。私は「作る仕事」が得意で、ほかの職人には「負けない」という自信がありました。

——二つの仕事にはどんな違いがあるのですか。

友國 どちらを得意とするかは、その職人がどんな環境で修業をして一人前になったかによるところが大きいと思います。どちらかと言えば現場はそれぞれ環境も違うし、その影響を受けて道具も狂いやすいという難しさがあります。

建具は現場で採った寸法に基づいて工場で作ります。その寸法が正確でないと、取り付けるときに問題が起きます。このように現場と工場がきちんとつながっていないと大きな問題が起きます。やりやすいと言えますね。作ること得意とする職人でも、現場に行つてはじめてわかることが少なくありません。そういう意味ではどちらか片方だけの仕事を知っているということではいけません。両方の仕事を知っているということが大切ですね。

ほめられても満足しないで
さらに技を磨く

——どのようなときにやりがいや喜びを感じますか。

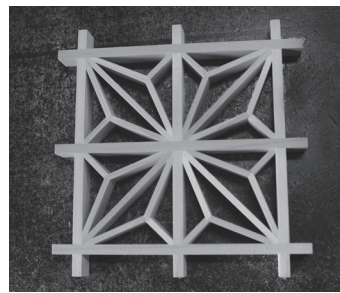
友國 工場で作った建具を現場に運び、ピタッと収まったときはうれしい



▲建具を作るときには、何種類もの道具を使う。鉋だけでも多くの種類がある。



◀道具は、その日の天候などがどのような影響を及ぼすかを十分に見極めてから使う。それをしないとよい仕事はできない。友國さんは、材料として無垢材を使う。



▲友國さんが作った「組子コースター」。釘を使わず、さまざまな形状の部材を精密に組み立てて、美しい形に仕上げる。

ですね。また注文をくださった工務店の方や施主様に、できあがりをはめていただいたときも、とてもうれしいです。でも同時にそれに満足してしまわないように心がけています。満足してしまふとそこで自分の成長は止まってしまう、それ以上のができなくなると考えているからです。

工務店から「建具はお前に任せる」と言っていたと、少し誇らしげな気持ちになりますね。任されるというのはそれだけ重い責任があるということですから。

——友國さんが作る建具は大量生産ではなく、すべて一品ものですね。

友國 ええ。注文の内容もさまざまですし、取り付ける場所もすべて違います。そういう意味では常に新しいものに挑戦していると言えるかもしれませんが、「今までやったことがないからできない」と決して言うてはいけません。むしろやったことがない仕事にこそやりがいを感じます。「やったこと

がない」を「やったことがある」に変える。その醍醐味を味わうことで、建具職人としての技も心も育っていくのだと思っています。

——道具にもこだわっていらっしゃるようですね。

友國 道具がちゃんとしていないといふ建具を作ることができませんからね。建具を作るときはさまざまな種類の道具を使います。一口に鉋かんたといっても数多くの種類があります。

私たちの仕事では刃物はよく切れることがとても大切です。よく切れないければ仕事が前に進まない。それには刃物を研ぐことを怠ってはいけません。もし私に弟子がいるなら、まず毎日刃物を研ぐことを指導しますね。

また晴れた日と雨が降った日とでは、道具に与える影響が大きく違ってきます。例えば鉋は台が木できているので、天候によって湿気の吸い具合が大きく異なり、仕事をするときはそのことを十分に考えて調整する必要があります。

必要に応じて自分で治具や道具を作ることもあります。工期を考えると新しい道具を注文していたのでは間に合わなくなってしまうからです。

自分も学ぶという姿勢で
後進たちを指導

——東京建具高等職業訓練校で、講師

として後進を指導されていらっしゃるんですね。指導されるときのポイントを教えてくださいませんか。

友國 道具の使い方を中心に教えています。繰り返すようになりますが、道具をきちんと使うことができれば、建具職人の仕事は成り立ちませんから。また生徒たちと向き合うときは、教えるというのではなく自分も一緒に学ぼうと心がけています。私もすべてを知っているというわけではないし、生徒と接する中で新たなことを知ることがあるのです。またこのような態度でいると、自然と生徒にやさしくなります。

職人というと「自分の仕事のやり方を他人には教えない」と思われがちですが、私は自分が知っていることは何でも教えようと思っています。卒業生でも聞きにくければ、答えますよ。それというのも、彼らが一人前の建具職人として育ってくれることを願っているからです。

——建具職人に向いている資質のようなものはありますか。

友國 建具職人の仕事は道具を使っているときの音やリズムで、刃物の切れ具合や正しい使い方をしているかどうか、ひいては仕事の良し悪しが判断できます。電動工具でもその音で、モーターの調子がわかります。だから私は「歌が歌えて、リズム感がよい人は建具職人に向いている」と思いますね。